

三星雄大の生活科（第1学年）研究計画

1 本研究で目指す子ども

私は、児童の生活圏としての環境に関する内容において、**身近な人に対する気付きの質を高め、あこがれをもつ子ども**を目指す。「身近な人」とは、学校で働く人々・地域で働く人々のことである。「身近な人に対する気付きの質を高め」とは、「〇〇さんは、～をしていてすごい」などと、かかわることで身近な人に対する見方が変わることである。「あこがれをもつ」とは、「～さんのように、ぼくはこれから〇〇したい」などと、思いや願いをもつことである。

児童の生活圏としての環境に関する内容において、身近な人に親しみや愛着とともに、あこがれまでもつことが示されている。今までの実践では、身近な人とのかかわりを通して、「保健室の先生はいつも優しい」などと、親しみや愛着をもつ姿が見られた。しかし、身近な人がしていることなどに気付いていても、あこがれをもつ姿には至らなかった。あこがれをもつためには、身近な人がしていることが「すごいこと」であるにとらえる必要がある。「大変そうなのに、毎日笑顔で仕事をしている」などと気付いたとき、あこがれをもつからである。

子どもが目指す姿に至らなかった指導上の原因は2つある。

① 人とかかわらせる際に、身近な人のことを見させたり、インタビューをさせたりする活動だけだった。

あこがれをもたせるためには、体験の質を変えなければならない。今までの実践では体験させるときに、身近な人がしていること（表情などを含む）を詳細にとらえさせることや身近な人がしていることのすごさを実感を伴って気付かせることが不十分であった。

② 子どもが気付くまで活動と表現を繰り返し行い、教師の見取りや価値付けによって気付きの質を高めさせるだけだった。

子どもの学習対象へのかかわり方によって気付きに差が生まれていた。例えば、繰り返しかかわる中で、身近な人のすごさに気付く子どももいれば、身近な人がしていることなどに対する気付きに留まる子どももいた。低学年の子どもが、身近な人のすごさに気付くことは難しい。生活科で大切にされてきた活動構成や教師のかかわり方は重要にしつつも教師が意図的にかかわらせたり、すごさに気付かせたりする場や状況設定が必要である。

そこで私は、次のように改善を行う。

① 仕事内容や表情や人柄を詳細にとらえさせ、身近な人のすごさを実感を伴って気付かせるために、身近な人と一緒になって仕事をしたり、作業をしたりする場を設定する。

② 身近な人のすごさを意識してかかわることができるように、「すごいことあつめ」の活動を設定し、視点をもたせて活動させた後、気付いたことを交流させる。

以上のように改善を図ることで、目指す姿に至る。

2 主張する働き掛け

(1) 「中核的な学習内容」

身近な人に対する気付きの質の高まり

(2) 「学びをつなぐ力」

・関係付けるすべを用いて、

(3) 働き掛け

単元の導入では、子どもと学習対象（人・もの・こと）との出会いの場を設定し、繰り返しかかわる活動をさせる。子どもは、学習対象とかかわることで、「次はここに行ってみよう」「友達が言っていたものがおもしろそうだから見に行きたい」などと、思いや願いをもって活動し続ける。

子どもは、この時点で学習対象（もの・こと）については意識が向いているが、学習対象（人）には意識が向いていない状態である。そのような子どもに、以下のように働き掛ける。

働き掛け1

複数の身近な人（「対象」）について、仕事をしているときの写真を提示する。

身近な人のことを知りたいという思いや願いをもたせるための働き掛けである。**複数の身近な人（「対象」※以下：身近な人）**は、学校生活の中で挨拶を交わしたり、話したりした経験がある人である。しかし子どもは、身近な人について知っていることはほとんどない状態である。そこで、身近な人について知っていることを発表させた後、身近な人が仕事をしているときの写真を提示する。子どもは、提示された事実には驚きや疑問を感じる。そして、**関係付けるすべ**を用いて、「〇〇さんの～を知りたい」などと、自分が決めた身近な人のことを知りたいという思いや願いをもつ。これが問いをもった姿である。

働き掛け2

身近な人と一緒に仕事をしたり作業をしたりする場を設定する。

仕事内容や表情や人柄を詳細にとらえさせ、身近な人の自分に対する思いを実感を伴って気付かせるための働き掛けである。身近な人と一緒に仕事をさせたり、作業をさせたりする。すると子どもは、身近な人の仕事内容や表情や人柄などに気付く。このとき、子どもによっては身近な人の思いに気付く。その後、個人の振り返りとしてお家の人に教えようと投げ掛け、仕事内容や表情や人柄など教えたいことを「〇〇さんのアルバム」にして個人で振り返らせる。

働き掛け3

仕事内容や表情や人柄などについて発表させ、『まねっこボード』に気付いたことを分類する。

仕事内容や表情や人柄を詳細にとらえさせ、身近な人について様々な視点でとらえられるようにするための働き掛けである。個人の振り返り後に、身近な人との活動を通してを発表させる。子どもが発表した内容を色分けして、「まねっこボード」に分類しながら書いていく。子どもは、**関係付けるすべ**を用いて、「まねっこボード」の写真と自分の体験とを結び付けて身近な人について様々な視点でとらえる。なお、働き掛け2と3はサイクルで複数回行う。子どもは、働き掛け3の後に行う、次のサイクルにおいて、新たな視点をもって身近な人とかかわる。

働き掛け4

『ハートボード』を提示し、どうしてそのように思ったのかななどを問う。

『まねっこ活動』を通して気付いたことと自分の気持ちを結び付けて考えさせるための働き掛けである。身近な人について様々な視点でとらえている子どもに、『ハートボード』を提示する。『ハートボード』とは、『まねっこ活動』のときに感じた子ども自身の気持ち（すごい）などを分類して貼っているものである。『まねっこボード』の下に『ハートボード』を貼り、「どうしてそのように思ったのか」などと問う。こうすることで子どもは、**関係付けるすべ**を用いて、身近な人の思いに対する気付きと自分の気持ちとを結び付けて身近な人の自分に関係する思いに気付く。

働き掛け5

身近な人とかかわって思ったことを表現し、「〇〇さんのアルバム」を作成させる。

自分もこうしたいという思いや願いをもたせるための働き掛けである。繰り返し身近な人とかかわり、気付きを蓄積してきた子どもに、「身近な人のことで、思ったことはありますか」と問う。すると子どもは、**関係付けるすべ**を用いて、今まで得た気付きを基に、身近な人のよさや思いについて気付いたことを発表する。その後、「〇〇さんと一緒に話したり、お仕事したりして思ったことをまとめよう」と投げ掛ける。子どもは、**関係付けるすべ**を用いて、自分と身近な人とのかかわりを想起して、自分もこうしたいという思いや願いをもつ。

「学びをつなぐ力」を自覚させるための働き掛け

授業ごとに、『〇〇めがね』の振り返りの場を設定する。

生活科の学習後に、『〇〇めがね』の振り返りの場を設定する。ここでは、①「どのようなめがねで（視点）」②「何に気付いたのか」を聞いていく。視点は、色や形などの他に比べる・分けるなどの考え方も含む。こうすることで、子どもは、生活科で大切にされている比較・分類・関係付けなどの見方や考え方を自覚し、以降の学習においても身に付けた見方や考え方を活用していく。

3 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、「中核的な学習内容」を創り出すことができたか。
- ② 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」を発揮することができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」を自覚することができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け4の後に、身近な人の自分に関係する思いに気付いているかを「〇〇さんのアルバム」の記述から検証する。
- ② 働き掛け4を受けて、**関係付けるすべ**を用いて、身近な人の思いに対する気付きと自分の気持ちとを結び付けて身近な人の自分に関係する思いに気付いているか授業の発言から検証する。
- ③ 「学びをつなぐ力」を自覚させるための働き掛けにより、「学びをつなぐ力」を自覚することができたかを『〇〇めがね』の振り返りの発言を基に検証する。

4 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業（6月） 「がっこうたんけんたいーすてきな〇〇さんー」（14時間）
- (2) 中間検討会（9月） 「つうがくろたんけんたいーすてきな〇〇さんー」（12時間）
- (3) 初等教育研究会（2月） 「ていきいちたんけんたいーすてきな〇〇さんー」（14時間）